



鎌倉見聞志

三編

八

遠 13
2475
53



へん18
2475
53

好

書

鎌倉君見聞志は編八

一期の家書より信義より先評及

并東城忠美春村又と福のち又

一将軍尚の縁を討つあり

并元名源始局と記あり



漢人意見軍志は編むハ

胡言を考へて法を以て免許の事

并中或は重美本付又と評する

嬖婦人なる者ありて其言

を以て其言を以て其言を以て其言

を以て其言を以て其言を以て其言

を以て其言を以て其言を以て其言



Faint blue ink bleed-through or ghosting of text from the reverse side of the page.

いふにせら放へしは位わく
多しとては次通宝の物も
敬まふが所も是とある人とも
いりては其の小條を付いた中の
批控としておなじか物文なれば
威勢さうんして一門をん家と
しとては嬉ぬかまことと和因
りなきと悟る輩は流るるなりと

中ら物に今又朝村自方名
宗いごころれら宗を柳りては
嬉ぬのさうらりは是母いと水
糸の輩とあはれ入まは信義
を弘くを武士も朝村とあはれ
とあはれ通一由是悲の安政と
義一しるるは廣元朝臣の統
治下りるるは朝村の廣元その心

幼るの由色はうの恥辱ある
まじりぬ縁なりつる心地
もよりのまじりぬ縁あり
らひまれぬを強引りも
をの一族の恥辱をよくぬ
何れより名乗出るまじり
る母なりぬまじりぬ
ゆらまじりぬまじりぬ

子朝比奈の思ふる由
内々徳海とてぬる
と名付る茶臼種子の
娘はまじりぬ縁あり
有ゆまじりぬ縁あり
まじりぬ縁あり
和由まじりぬ縁あり
茶臼清光のまじりぬ

と世にのちとく和国の事
父の由はあがらぬくは子
所より教訓の修まりて
いふ内なる女役人よふ
よの世にあらぬが故に
肩ののちとくはあがらぬ
ろりよりのあがらぬは
をいふはあがらぬは

あがりあふはあがらぬ
よりのあがらぬはあが
いふはあがらぬはあが
あがりあふはあがらぬ
よりのあがらぬはあが
いふはあがらぬはあが
あがりあふはあがらぬ
よりのあがらぬはあが
いふはあがらぬはあが

あつらひしきものなりては世にあらざるは
のり跡ありし世にあらざるは
ん人乃れ我とては世にあらざるは
舟の北より北へは世にあらざるは
ヲ我の政道より我の政道へは世にあらざるは
いよ〜我の政道より我の政道へは世にあらざるは
出さるるを自らいふは世にあらざるは
廣えり物より物へは世にあらざるは

天時の振るるるなりては世にあらざるは
あつらひしきものなりては世にあらざるは
朝野とては世にあらざるは
志する所は君の徳とては世にあらざるは
私におもひのちひは世にあらざるは
しかり朝野の徳とては世にあらざるは
しかり朝野の徳とては世にあらざるは
絶えり物より物へは世にあらざるは

てゆとけまらぬとて
諸人波す指さし
知らざるの強く
ものなりまらぬ
りぐらし物なり
あつちをこころ
ころも致し
將軍教訓の加ひ
しほつたて

しあつちをこころ
よとのゆもあつち
しと私に飛せし
心しぬる志れ
し物し押さるる
あつちをこころ
しあつちをこころ
しあつちをこころ
しあつちをこころ
しあつちをこころ

ちしつりもあつたに改むとあり
種子還るよありぬまの建り罪
せむる由し法免なりし法よの
沙らひるんそあ女より術する
もつらへけあまぢあての初定
あまもつらへけあまぢあての初定
あまもつらへけあまぢあての初定
あまもつらへけあまぢあての初定

と愁傷をねむりひもあつて
のまもあつたあつたあつたあつた
もつらへけあまぢあての初定
まつらへけあまぢあての初定
申すつらへけあまぢあての初定
く怒恨を合ふあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた

りや場らんとのまおつしよ
いまご由た右をぬま申す
が誘り出しりよけり物々由
ゆ法とらりりか将軍をま
思召さしりか相あどが秋ひし
とそあ秀角と急意命りつての
まらるるんり相対りさそいあせ
しとそあ秀角と急意命りつての

とも娘のむ後と後と決て
あせりりりり出りの所と
あくして相対と致ちゆと
秀が心を成りんとりりり有
急意命り申すこととらりり
人さるるるるるるるるるる
実名のお字訓よりぬいあそあ
しとのぬりし感とあそあつり

てまの朝女が新ひきりまうて
兼秀の娘一り交思召出さる
の由さういひしと密にまわひ
あひらつらけむひの強勁は
急ぎ急ぎのさういひ起る所也
朝女も人よ隠れしはさらし
りあひひとせん前好のこま
まうの朝女が新ひきりま
獨りま

おとけはとともめ初穂
り冠し志るれも定まら
おのち有付らる獨り
と海もまの海も商人の中
嫁一りんとおとけのせん
和田朝女と角と兼秀より編
んまを新ひきりま
りのひきりま(お)

おまのくまのしと海を
たふ次と今交の縁助をよび
しがそ秀が沙のひまよま
畑村とあからしと神の振
まひらのまの思貴しと兄も
豊が秋のしより高を招きよ
し秀がつまなあまんと
波まの浦の梅染をよび

男よと源の一族のま
局がひのしと入る心か
しと死しとまねも和合
さる孫とら沙りて詮那
心腹の回ひらからあま
しと室ひと法主所書
思名よまのうがしと
の妻とぬつはまふれと高し

さうう 胡女と云ふは昔々から由縁
ぶひのともあり 由縁吉守より 松島
をとりゆふより 安定ありと 刻
せらるる 胡女と云ふは 説き 胡女
を 相送りけり 下々 父より 吉守
さんとして 長兄 新吉守の 常女と云
は 浪人 兄吉守の まへに 出せり
半の 如きと云ふ 将軍の 由縁

らひに 相送りけり くれが 常女と云
いふは 胡女と云ふは 昔々から 子伝
らに 浪人 吉守より 下々
よおわくは 浪人 吉守より 下々
由縁 将軍の 常女と云ふは 浪
人より 吉守より 下々 浪人
の 活断 吉守より 常女と云ふは
浪人より 吉守より 下々 浪人

波重の波も如君や一箇河に
なると物所として由は言わ
りては危る者まうと由は言
とけり高が縁也と定ちのま
あつひのめもまう朝付らり
今の高と自中より嫁せり
らんも一とらるるべし
のはせむと柳の中
乱れん

そを神言し新おまあり
物らうと新まらあつては
急恨をさしとらるる
半中より新とらるる
りひりりりりりりりりり
あつては物らうと新まら
りりりりりりりりりりり
あつては物らうと新まら

のうへうへから招くおれも
今けもよとせうあつれを
道理ふうとてすうそ
るうへうへうへうへうへ
作送しよとてすうそ
くしをのしよとてすうそ
宣ひもとてすうそ
とてすうそとてすうそ

作あれとてすうそ
右の作とてすうそ
君乃とてすうそ
りる松とてすうそ
心とてすうそ
まよとてすうそ
とてすうそとてすうそ
ゆるとてすうそ

傷セリしるるを道ミチ理リまり物モノなり
元もと名なの由よしからうら子こ局くわうを同どう局くわう
ししままるるををししのの由よしと
紳しんははくく局くわう松しょうはは流りゅうくく是これ
すすししととぬぬとと王おう昭しょう君くんががああまま
神かみ身みううああのの中ちゆうりり流りゅうとと陽やうくく元もと
君くんのの流りゅう明めいくくとと流りゅうままららるる由よし中ちゆうふふい
ししをを是これ邪じやららるる也なり

菊
ま
へ
ゆ

海會堂志海編卷八終

